

科学基礎論学会 2011 年度秋の研究例会

ワークショップ

夢、時間、自己同一性の哲学

司会・進行：水本正晴（北見工業大学）

提題者 1：渡辺恒夫（東邦大学）

提題者 2：三浦俊彦（和洋女子大学）

提題者 3：加地大介（埼玉大学）

現実とは何か、認識は可能か、といった問題とともに、夢は哲学で古くから語られてきた。だが夢は、単なる想像や思考実験と違い、それ自身が何らかの哲学的主張に対する証拠をも提供するように思われる。例えば最近のクリストファー・ノーラン監督による映画『インセプション』（2010）の中では、登場人物が他人の夢の中に入り込み、夢の世界を操作しようとする（それ自体は目新しい設定ではない）が、そこでは夢は何重もの階層構造を持ち、より深い階層においては時間の進み方が遅く（早く？）なっている。この映画はあくまでフィクションであるが、実際、夢の中で夢を見ていた、夢の中で何日も経ったはずなのに目を覚ますと数分しか経っていなかった、あるいは夢の中では自分ではない誰かであった、という経験が誰しもあるだろう。こうした事実は、時間や自己についての哲学的考察にとって、可能性や限界についての具体的なデータを提供しているように思われる。もしそうならば、それはどのような証拠となるのであろうか。そうした考察はまた、夢というものについての新たな哲学的興味を引き出すことに繋がるように思われる。だがそもそも我々は、夢について、（脳科学的、進化論的、その他客観的研究を別にしても）内在的にどれほどのことを知っているのだろうか。

本ワークショップは、こうした問題意識を足がかりに、夢、時間、自己同一性のそれぞれトピックの専門家の議論から出発し、これらのトピックの間の内的な関係について考察・議論することで、それぞれのトピックに対し新たな哲学的考察の材料および（願わくは）新たな洞察を与え、より深い次元から考察する契機を提供することを目指す。

（本ワークショップの企画は「インセプションの哲学」として始まったが、それはあくまできっかけにすぎず、それぞれの提題者の考察の深まりの結果、必ずしもこの映画と関るものではなくなっていることをあらかじめお断りしておきたい。）